



俳諧一葉集

^ 5
2179
6



芭蕉翁後句附合文章茶話俳句遺法消
息也一代之風藻雖不可忘予茲前謂親覩
於古書收藏於他庫者悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北榎甲

一具菴藏梓



序

俳諧者死常乞而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
夫然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛則語默作之無有不善故



門 5
號 2179
卷 56

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有渚者沂源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 人, 月, and 日.



佛諧一葉集紀行之部

甲子紀行 又稱野

不里子松立て浪野と色は三更月正身向入とひひけん

むの人の杖すまうと貞享甲子秋八月江戸の破屋を

とむの風の高そそるさけり

秋十とを却て江戸もさきり古

新ら〜のりか〜のりか〜のりか〜

新ら〜のりか〜のりか〜のりか〜

古学庵佛号 編

幻窓 湖中

坎窩 久藏 校

きりしりさるる不二とてぬりてせしりき

何りしりさるる不二とてぬりてせしりき
心もついでに付る言も真逆のおりしりさるる
此人

源川やきききき不二子ゆのけりて 子里

不登川のいともをゆへに三はくしりさるる
位ありし川のおぼれかけし浮き波をききき
らうらうらうらうらうらうらうらうらうら
やちふんやちふんやちふんやちふんやちふん
秋のふゆの

猿もみ人控りしりさるる 秋のふゆの

いりしりさるる母もいりしりさるる父もいりしりさるる
おしりしりさるる母もいりしりさるる父もいりしりさるる

大井川をこしりさるる大井川をこしりさるる

秋のふゆの向はしりさるるゆのり大井川 子里

るよの吟
そのまじり本狩はしりさるる

廿二日の月かきりさるる山のおぼれいりさるる
鞭もいりさるる数里いりさるる難れいりさるる杜牧、早行の
中山の玉をいりさるる

ついでにたぐりしりさるる月暮りしりさるる

杉葉屋の瀑、伊勢の山いりさるる家いりさるる十の
下見をいりさるる橋をいりさるる帯にいりさるる一葉をいりさるる
子年十八の珠をいりさるる信をいりさるる似る信をいりさるる

余信千代の心も... 神楽の心も... 三十一日... ありの神... 女... 子... 草... 閑人の... 草... 植... 竹... 田... 五... ち... れ... 飛... っ... ぶ...

長月のはじめ... 大和... 五里... 二上... 神... 心... 佛... 縁... 心... ら... れ... る... 芥... 斤... の... 花... を... ぬ... け... る... 事... 々... 々...

三

信をたふいく取つた信の松

ひらき芳地のたぐいさかきつらうりやと尺山ほく白を
ゆりまきつた南谷をこぼさく山殿のたふさくしつらひさく
く本を伐き束うのき院くの積のたふひのたふこま
昔より山より入るきをこまねら人のたふくは詩ののた
ふりかきいさやたられ庵山といふ人まこむのたふ
りつたつたつたつた

破ちくあつたつたつたつたつた

あ上人のそのたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
入つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

不破

つたつたつたつたつたつたつた

大垣より帰るに初は本因り家をこまへておきし御んを
対面ししを心より思ひて旅さしけれは

死やきぬ旅のつとむれのとれ
葉名お富ちりし

み牡丹まふよまおほしき
雪の杖より宿傳えまてのりしま中上宿のたをわ

りけほのやま真白ふらり一す
越田子宿の社殿大に破れ築地はなれし雪の
かくつりしを強と強と小社の法を志ししに石をた

てり神と名のる雪まのふ心のすまはしりし
めしなごうとふしりし
まのふまく杖より餅よりやりし

名護屋より入るその山と御ん

狂の右より一は家の竹をわゆる
雪杖大と志しりしうすしれ

市人よこの雪杖一杖の雪
旅人もん

雪杖大と志しりしうすしれ

海をゆく野のありし白

雪杖大と志しりしうすしれ
雪杖大と志しりしうすしれ

雪杖大と志しりしうすしれ

とらふしと山あふ年とく

流聲了る者ふあ餅村ぬ丑のこ

なまらふりぬそのは

まをるれやうたふふ山の物さう

二月あふ花

水ぬや水の花は皆のね

あふさう三井秋のつづぬ山あふを

梅林

くは白きふや花をぬき

櫃の本の花がふらぬす

伏見西岸古任のよ人の海

あふさう伏見の木の末さよ

大津のむろ山あふを

山あふさう向やう海うす

水あふ

かきさぬのたをちう

谷のあふさう花屋のあふさう

はさういけさうけう干

吟行

あふさうけう花屋のあふさう

水あふさう花屋のあふさう

命あふさうの中う

伊豆のあふさう花屋のあふさう

あふさう花屋のあふさう

ひまわりけれハ

いづれにゆく猶もくらくらん 子秋

はげ多し昔と言ふ覺寺の大願あるは 卯月のけり
は化しゆくまじりや馬の如きしにまじりて
其角子一りつりし

梅香く卯の心をいふ玉あはれ

野村玉

白けしと胸もく控はかきし

二つ山桐葉子の梅子ゆりくをわきまきし

牡丹葉涼くまけぬ 増はる我ハ

甲斐の山中とまじりし

ゆく駒は表すふくきむた

卯月の末尾にゆく梅の芳とらん 子秋
まなむいさるみき

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

藤島日記

海の真室津川の浦の由見の由みく

松ヶ付や中ねん三玉中一物を

とくけん程丈のむいひのあひまきまふはれたがうらぬの
 月見んの思ひまきこりした人かう信家の士はく一人
 めやまの傳こかくすのうらぬ事の名もこの信を於
 うあけ出止の信を厨子うめ入くさううらぬと
 新杖にあはくう門の筆まさらうめくはあはら
 智あはくぬくふいひの傳まあはく信まあはく
 けのうらぬかきうのうらぬあはくうらぬ
 舟うらぬうらぬあはくあはくあはくあはく
 河原のうらぬうらぬあはくあはくあはくあはく

或人のあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 うらぬうらぬあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 耶うらぬあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 山あはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 めいひうらぬあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく

と流しあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 けをけくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 あはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 あはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 お入くあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく
 中あはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく

ついでゆきとて神の御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
り歌子をもとへに利根川のほとりへもよおすもよおす
はくは川にむねのありけりその成にふきと武はは
市にゆきとてあつきの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
よよのやちんもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
さしらふともよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
庭へともよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
叶もよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
人をもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
やいもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
ちもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
きりもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし

月と子と東とるかひあふりつらなふりもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
は女すとつりあふりつらなふりもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
そはふりつらなふりもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし

和尚

まつくはかきこゝろのきこゝろ
かたわち 椿らんをもちあはく
ちもわはすもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
あもわはすもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
月と子と東とるかひあふりつらなふりもよよの御心えはる御ちれあはく又ゆきせし
神あり
月と子のあはく又ゆきせし

槻青

昌良

宗波

槻青

ゆくとくや石のおまの昔のま
縁おちやがしきくおくまのま

宗波
曾良

田家

かろけー田向の都や里の秋
秋田うらなまやまぬん里れ有
秋の子や稿すうけく月をこら
芽の葉や有さの里れ焼さしけ

秋青
宗波
秋青

野

もくひや一花すうけ秋ころと
あ秋まきうらぬく秋すうらま
秋まきや一花ハやまの山のた
物法自準とあり

曾良
秋青

樹をよまう干石れ友すう
秋をこめくらくわのさし秋
有んくしひふのむら舟とえく

秋江
秋青
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

卯辰紀行 又稱芳野紀行

百餘九穀の中より物りかきし名付て風心野切と云珠う
 けすもの風を破とやすうふんて成さう和所ふんか狂
 自をぬふて久し候き生海のそつてしあて疾舟を
 使て放擲せんて候おひゆの射はすんて人今かたひを
 なく見非狗中をけふさうこぬる名をあるは志はけ
 るとて人て候おへもぬるおきとてんてれとて
 是く更もさきと人事を思ては是くは年破も是れ
 守能年氣うては只一筋に候ぬる西行のおきおけり
 宗能の道きうおける舟舟の傍における利休もきおけり
 今貴をすものハ一ありさうては終における造化とては

て候時を友とす尺く候る花よりゆふのときと候おも
 ぬかたあふんてとて候て思ひ志をありさう時を末秋
 ひく心花よりゆふさう射はき數すうくひさう末秋を
 う歎もとあれと造化と志とつひ造化子とて候て
 卯辰月の初夜とてめおおけしきぬる風聲のり方を心
 地とて

松人てこの名もくれん初とて
 まて山屋あをぬくす
 岩珠の位長左郎とてそのあて松をけり女角亭におめ
 舞道とせんともしあす

みん秋より時をくせん松のほと
 けりハ海流とてけりけりせけりてをてあおけのけり

五十六
五十七
五十八

へい先越人子治也一と云ふ所より治と云ふは二十五里あり
功りて其後より一里あり

今けりて二人ありて其の事

向きの磯手田の中をたうそめりて海に決りて風は
まじりて

あつたや言ふよりぬるかけり

任五村より行良古崎一里ありて一里ありて三河田の地
はまじりて伊勢と八海通とを交りてぬるもかきりぬる
そめりて其の事いひてその中より入りていひて海崎
りて其の事いひて其の事いひて其の事いひて其の事いひて
海崎より南の海にたうそめりて海崎の何れにたうそ
そめりて其の事いひて其の事いひて其の事いひて其の事いひて

あつたや言ふより

海崎のり尺りけりて結いりて

無田の伊勢

海崎より鏡と鏡と

海崎の人より其の事いひて其の事いひて其の事いひて

海崎の人より其の事いひて其の事いひて其の事いひて

あつたや言ふより

あつたや言ふより

あつたや言ふより

あつたや言ふより

あつたや言ふより

あつたや言ふより

かく後くさる砂を古跡より護るをわが旧里をへんとす

旅ねさる尺一や浮舟の如きさるい

素舟よりくさる木ぬれもさる水の里よりくさるくさる杖はな
坂のちりほひ新跡おとすくさるくさる若ぬ

かちちりくさる杖のき坂をさるくさるくさる

と物さるの跡より出たれより跡を季の初めは

古さくや箱の子をくさるくさるくさる

ちりの手さるの跡をくさると海飲杯ありさるくさる箱より
行くれ

ニククとぬくくさるくさるくさる花の素

幼妻

まらまらくさるくさるくさるくさる山より

杖さるやゆ、跡をくさるくさるくさる

はな石河波たるとや信宗上人の旧法より護峰山新大
佛寺よりくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

く礎も跡に杖をくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる
苔のみくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くく上人の海新いすもくさるくさるくさるくさるくさるくさる
跡よりくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

のまらぬいさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる
くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

文あり跡をくさるくさるくさる石の上

旅主蟬吟くさるくさる

きんくさるくさるくさるくさるくさるくさる

雑記

廿日

伊勢山田

伊勢本の花とてしつゝあつた

程々ハまじりまゐりてあつた

菅堤止

伊山由止 一 さまよつてわたり

龍崎舎

物のりまをまじりてあつた

彌代民部舎

梅の木とてあつた

宇治舎

芋植とてあつた

津垣のうらまへ梅一本とてあつた

月夜 予が侍れは共ゆきとてあつた

おまじりてあつた

津垣やあつた

やういふとてあつた

ひく枝とてあつた

いふ古時とてあつた

旅のゆきとてあつた

たつとてあつた

こゝろとてあつた

れとてあつた

乾坤無位同行二人

...

よし... 換尺... 柱本... 一万... 旅の具... 物... 千... 万...

古の花や露人ゆ... 花の... 万...

葛塚山

花... け... け...

三編 武峰 編... 武峰...

や... や... け...

花門

花門の花や上戸... せん

風... せん... せん

西河

わ... と... の...

晴... 布... 二十五丁...

布... 不... 大和...

寺... せん...

橋

さ... 橋... 五里...

...

口を花にうつらうつらと
扇をい風にまわすや
昔は水

まきの木にうけし
おのれは月影の
接取の縁にうけし
これにうけし
とてうけし
とてうけし

父母はまきにうけし

おのれは

和歌

おのれは

腕はうけし
かへし
昔はの
人の
おのれは
おのれは
おのれは

又の風程何人か何の心もなかりしをいふは
古めりかたの心もいふは人の心もいふは
つとむかたの心もいふは人の心もいふは
中にもいふは人の心もいふは人の心もいふは
人かたの心もいふは人の心もいふは

更衣

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

澄佛の心もいふは人の心もいふは
いふは人の心もいふは人の心もいふは

澄佛の心もいふは人の心もいふは

板橋寺經志和尚本邦の村船中七十餘度の難を

海月の中は風火入る難く海眼育さるるをいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

向友子をかたの心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

大坂ういゆ人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

いふは人の心もいふは人の心もいふは

このはしらの... 下への... 赤心道の...
... 長楚東南の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 尾上つき丹波... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

入世... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...
... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

同くもら改をわむつてめすあかのかのさぶのた放懐のな
くくもたひすまもやも枱量一糸をも屋へいすまことみぬ
あはれうらふらゆらうのそふく敷を夜一ゆのゆや一
思ひつゝもあはれいそふ徳懐めさけつと共うゆさ
まむらゝたさるゝいふたみあゝる月影の燈の破れろく
本宮からゝまふま入る引枝の言あやめあゝくむくしこみ
けらさくひんき秋のこけらこけらあやめくへてや月の
ゆら酒さまそんてやいそ持あうらうのつねに一ぬらぬ
大きうこゝろあうのふら遊路をくけ人のいひまのい
風流あゝるゝいふらゝるゝあゝるゝあゝるゝいひ無ふい
晴魂玉危のこけさうらうのあやめいひ
あは中ゝ遊路まゝ一言は月

うけいやのちそくしむさあつ
かけけ一ちかひあひめ初志うい
あふこれぞ桜の目くらゝうたけ 越人
妹狩山八情いり里くし一里くう南に西南の橋をたそ
すまわしくとくもあひめかじし一き思れぬたてい
あやいれ海山の上とあうらうとあやいひあゝあゝ
いひきいれくもろくあゝまゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ人
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
休や妹いり月友
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
更科や三つあゝ月尼やあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あけのぼる大根かきし秋の風
木石の縁なき世の人北の夜うきま
遠くさしおらうけりて木石の秋

善光寺

月影や四門白雲も思ふと
吹飛するる海百れ世かたの

おくのぼる

月を言代の過客よりゆきふ事と又旅人多し舟の上り
生涯をうらむるのほしく老とありふものなり旅より
旅をすくるとす古人とおぼく旅り我をうらむるもつら
事より行やの風をさるうれは海伯の心やとに海濱より
さすく七十年の秋は止れ破屋の古き事をとるうらむ
もこれまきまの世のやうきうらむの事なりとる神は
物よりつらて心をもとるの心を祖神のまひるをうらむる
もつらつら殺しの破れをけりて世の秋はつら三里より
すくくつら松島の月をうらむるはつらつら方へ人なりゆつら
風を禁つらつらに

言代の戸をばあつた代り心家のあ

打ぬく体しめしむる事あり佛の習を悉くし示現して約る
 東門の乞食唯れして人の人々をばけりやとやとやとやと
 する事ありてはめりて只を習せりては直に佛固は
 ものありて則ち本神の仁をばけりては直に佛固は
 之

お月影のゆきし指ぬきては昔のゆきしを二葉にきりて
 古海大砂の基の対り光とゆきし人々もみよみよとさき
 のゆきしや冷けゆきし二葉のうやふく思ほ八葉のゆきし
 安流の極おとやとゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 ゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 利持と思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

曾良

曾良八何命なりては思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきし
 予は新水の芳しきゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 一とゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 山のゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

二十箇下山をのりては思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきし
 岩の磐石をゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 此はゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

志はゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

此はゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 直にゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
 の事ありては思ひ山はまゝゆきしゆきしゆきしゆきし

世阿弥のふちりまれのさうりあけふすれは神又とていふま
する情しぬまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌
楳ふといれりいし一き旅人のそあしなふんゆわ
ゆれは氏百のいひかきあしふるまをく一まともかし作りぬ
らしりまのゆまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌
なをいふまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌

あさねばい八音あま一このたあふん一骨良

やうし人里ふりつれいあふゆも我あしつれはしをきさしぬ
黒羽の錆代浄切音あふゆのふさふさあふゆのふさふさ
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見

那波のよのふちりまれのさうりあけふすれは神又とていふま
する情しぬまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌
楳ふといれりいし一き旅人のそあしなふんゆわ
ゆれは氏百のいひかきあしふるまをく一まともかし作りぬ
らしりまのゆまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌
なをいふまをりつらむいふまふおまねといふ神を歌

あさねばい八音あま一このたあふん一骨良

やうし人里ふりつれいあふゆも我あしつれはしをきさしぬ
黒羽の錆代浄切音あふゆのふさふさあふゆのふさふさ
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見
けははひのわらうらうらけさす糸桃翠外へさう新夕花と見

五山に於てゆけきりし言をたつと松敷くろく昔志
しとて即有力たてむきや十景たる木松を渡り山田八
さしかの松をいひくの後いよと好の山字とらのむれに上は
小虎若窟と砂のけりて好経沙の死并はたはけ所の石をま
尺くく

本場く虎を破りしに本を
とる所ぬ一句を柱す跡に作りしうれう殺生石をゆく
能代よりうりて置りて六日付の色のと種無えをよとく
やききりしを字に作りしものなり

神をも横りてしんむけは後いひ
殺生石を温泉のゆりしけりてゆり名の毒毒いかにむらひ
破りたるいま妙のきけりぬにしかさめり死す又後

もあうりしは物ハ其妙の里りて川の畔に跡は此寺の歌
かひ歌某の可物尺をむりやれしむりしこのさかひのまを
いひくはほりてやと妙のいしをよと妙のうけりてはら
より作りしれ

田一板 植すべからざる 物 うちま

心許もふりぬかきぬちをにきり川の岸にかりて松のさ
すぬいしはれしをむりてはらりてはらりてはらりては
并に三園の二りて風語の人心をむむ枯風を耳に跡し
紅花をて作りて青葉の梢にゆれぬり即のむらひゆり
は次の花は咲きひて香りてうゆり心地をすりて古人村を西し
衣襟をてゆりて人下りて清猶の茶をててぬ豆れしを
くのちをかきりて并のたれえりぬ 骨良

はな首をひねる面には
お母さんといふかき
ていつか

月の満ちてくるころに
田舎の山際一里半ほどにあり
木影の里錆野と名
あつた
昔は大きな
池ありて
是れは日々の
水と
榎は
大木の
影を
人の
影を
かこつて
村の
一人の
婦人
さき
の
寺
へ
入
り
て
し
め
し
し
物
と
し

及て左刀と五月から六月にかけて

五月の初めのころに
お母さんといふかき
ていつか
田舎の山際一里半ほどに
木影の里錆野と名
あつた
昔は大きな
池ありて
是れは日々の
水と
榎は
大木の
影を
人の
影を
かこつて
村の
一人の
婦人
さき
の
寺
へ
入
り
て
し
め
し
し
物
と
し

わがしるべきは... 竹丸... 竹丸... 竹丸...

岩... 武隈の... 武隈の... 武隈の...

わがしるべきは... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸...

わがしるべきは...

横より... 横より... 横より...

わがしるべきは... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸... 竹丸...

浦ふか再無きくわく言ねや〜く彩撮き〜いわん石の
 陽九奴千言く彩なゆけのまらぬを〜やううゆ〜そのま
 蒼去のき〜い〜し神雲ゆ〜い〜ま〜い〜ま〜い〜ま〜い〜ま〜い
 俗あり〜い〜き〜行神あり〜在〜言〜行〜ゆ〜かおのら〜い〜の
 面千文治三季お原三郎家進〜い〜ま〜百〜季〜末〜の〜伴〜今〜月〜の
 お〜千〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 住居〜千〜取〜ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 行〜失〜義〜を〜ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 千〜千〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 島の後〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

同た西海を船を東南う海をへく江の中三里湖にの湖

といふぬ志ん〜のぬを〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 けを〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 といれた〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 のみ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 とや〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

龍島は八地にきき海にわ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 龍や〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 とい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 とい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 とい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 とい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

寺の南にありて、
 中ノ松ありて、
 松ありて、
 寺ハ、
 対馬、
 寺ハ、
 十百瑞岩寺、
 一人、
 依て、
 大威徳、
 と、
 十百平和泉、

寺ハ、
 船入、
 つ、
 寺ハ、
 三代、
 御、

のちれハ北上川ありあう大河に在川ハ和泉り珠をめぐ
てふ方智のつよし大河を著入康徳ホの四徳ハ衣の并を論
南歌りてさうりて久夷を防くと尺しうさうて義をすく
きう此城を籠り功治一時の事あつてあつて國破れく山河所
珠着うして草まうとくも望おあつて時のうつさう海を
音しけらぬ

なまや 佐とものとも 口のゆと
くの志うし 志あふんぬの白毛 うれ 曾良
かたし耳勢しとるニホ一帳す煙まう三将の像と御し
尖きとる三代の楯を破れ三子の佛もあ置す七言ふあつて
く珠の尻風う破れ幸の楯まもす朽く既に敷慶を左
の幕とれく人を四面めくくかたみさ甚度とや後く風白

三のく勢あまの代念とくあめ

さみしあれ海 跡してや 光 巻

きぬはそくくも尺さうさ若みの里を泊つ小忌答くわの小島
をこくあるこの湯うら屋おの并ううらうて出羽あうさうん
とす此法旅人の中あつてあつたれハ并あうわ あつてさう
あつて并をこく大山のうらうて口改り答けくハ射人の家
を尺うけく食うさうもむさ風あられくさう 風と并の屋
君さうみさくお屋さう 巻
あつてゆえんれあつて出羽あう大山を論はささうさうさうハ
さきくの人あつたのさうさうさうさうさうさう人さ
あつてゆえんれハ寛慶のさうさうの及船差を横く楯の杖を携て
あつてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

かへは海にたれ ひとしづかにあはれぬるまはるかに
 高山素より一とさあみま本に雲きけりあはれぬるまはるかに
 くるとおゆまはらむとたれに雲の中よいかへりたれ
 りとて若手職を肌をすめぬとけりて最上のたれ
 かの葉肉をききまのこのまゆふそた不用のまゆふ
 きてつたおのむとけりてけりてと投てこへたぬはるまはるかに
 きつ袖とてわくのいふ

尾花はるまはるかにあはれぬるまはるかに
 志とや ひとしづかにあはれぬるまはるかに
 くれはらけりてあはれぬるまはるかに

海にきけりてあはれぬるまはるかに
 ひとしづかにあはれぬるまはるかに

眉拂を伊りて紅粉の花

慧智のすく人ハ古代のすくこれ 曾良

山形傾き之石もさる山かへり 道曼大砂の西巻りし縁に
 法開の地より一尺すくふより人へのすくむる縁に尾花は
 よりさるへり 千石七里とてこのいかにさるまはるかに
 ねりて置て山よのまゆふのほり若く置をなすく山に松
 柏やうと名をく若く置をなすく山に松
 ねりて置をなすく山に松
 とて置をなすく山に松

志のりてあはれぬるまはるかに

志のりてあはれぬるまはるかに
 志のりてあはれぬるまはるかに

八月廿二日 本條志ん方より引くけ宮符と改まつてみ
徳力と云ふものこそひんくちや方にかまの中へ氷を踏
やして八里更なる月行道のや解入るくゆや一もれ
息絶ふくえく頂上へ踏れはなほく月あつて世を愛
涼しく枕とくく山くゆく待りかておの消れはゆあ
管のかくくくく銀治お解くくくくゆの張治雲水くくく
了くくくくくくくくくくくくくく月くくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くけくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
花のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
行そ信

山のふもとにありてはくくくくくくくくくくくくく
山中の隈面行者の法式とくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

坊の角れハ阿若利等の需を依る三山山礼のくくくく

常くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆき山踏ふくくくくくくくくくくく
題をくくくくくくくくくくくくくくくくく
おくくくくくくくくくくくくくくくくく
酒田のみくくくくくくくくくくくくく
あいつくくくくくくくくくくくくく

早ふもを海へ入るるもみ川

江山水障の風光も盡くると家傳の方寸をさめ海田の
凄くも東水の方寸をさめ破も侍ひいとも踏く今際十
里り新海かきくはは海吉砂も吹上雨襟統くく
多海の山かくる関中も英傳く向く又赤竹くとも六面
海も晴色もく船もくもつらの管もく膝も入る雨の時
もくつれも新天くくもれく船もくもつれもくもつれも
多海も舟もくくも先能困も舟もくもつれもくもつれも
の船もくつれもくも舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
さく極の先木ぬりは海の記念も舟も舟も舟も舟も舟も
神功后宮の御堂もくも寺もくも満珠もくも式もくも行幸
つれもくもつれもくもつれもくもつれもくもつれもくも

い層も横ハ風索一眼の中もくも南も海もくもくもくも
かけうつうもはつれもつれもくもくもくもくもくもくも
も葉も秋田もかきくもくもくもくもくもくもくもくも
あもはくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
又くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
さくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
きまもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
ゆもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
あ記

多海や神聖何よみ津カワ
みみの
あつたのあや戸板もあつた
佐耳

巳

三十八

一 高千穂 世女とあつらふ 萩と 月

曾良とがれはせしむけりてる 廻四十八の瀬とらやあし
ぬ川とてくくつて 水有とて海とて 楳栗の夜浪は青きふに
くも初秋の雲とてくくふものをもと人きあられはれり 五里
候つてひしむちの山麓に 入りたのやうかきうけられ
せむの一枚のあつらふのゆきとていひわたりれり 加賀ふ入
るやのまやとけ入 ちりて 萩
卯の赤山とてかきうけりてくくき 卯七月中の五日しり
大坂よりかきうけり人あつらふとてのゆきとてこれとて 萩
一帯とてこのゆきとてすけり 萩のゆきのゆきとてあつらふ
一に生事の早世とてくくく 世見 追善をくけり
塚と 鞠け 糸 匠 萩 八 月 萩 の つ ら

ゆきとてあつらふとて

秋とてしとてあつらふとて

色中金

あつらふとてあつらふとて

小ねとてあつらふとて

あつらふとてあつらふとて

此書左田の神社に 諸宮寺の甲斐のきれあつらふとて 源が
属き 対義物とてあつらふとてあつらふとて 平吉の
子あつらふとてあつらふとてあつらふとてあつらふとて
あつらふとてあつらふとてあつらふとてあつらふとて
あつらふとてあつらふとてあつらふとてあつらふとて
あつらふとてあつらふとてあつらふとてあつらふとて
あつらふとてあつらふとてあつらふとてあつらふとて

むらんやれかよのらおまうら

山中の温泉にゆくはきくね森法師の足跡にゆめをたの
ら陽の鏡を帯びて山は空三十三所の聖札子まをりて
大慈大悲の像を安置し多分りわたりわが
谷組の言葉もさうら情しとさう言ふもさうし
昔とさやの小寺岩の上を造りうけく集徳のちたし

石山は石ころきりり秋の風

温泉に浴する母切らさうら次や

山中や菊のよきうめ湯のまらひ

あしとすもの久米の助とて少きこかれ父仇徳を
みほの良妻は雲のむらにまらりて風物さうら
うさうはうゆりぬの門人を集くきりまらりて地元の
村お河の料を清きとて文むりかきとて本ぬ

曾良の娘も病く停禁も長を中とて雲のゆりぬれはさけ

ゆきしとさうれ休も秋のまらり 曾良

とさうまらりゆりぬの止しゆりぬのうらみ雙を記のさうれ
ゆりぬのやうらとてすまらり

ゆりぬのやまけさん 雲のまらり

大聖子の妹か令る寺とさうらゆりぬのたか賀の地し雲ら
のたけちとさうら

秋の風 秋の風 やうら山

とさうら一夜の陽を里子同一とて秋風をゆりぬの
ゆりぬののまらりて清浄ありすむらに停板あり食を
す入る少を秋あふくとて早卒とてさうら下るさうら

停るも残破をうへ階のまをまわひ来りおる庭中お
柳られハ

庭掃くもやや寺子らハ 柳

おのぬき片々子靴あつて手控の体前の境吉崎の入口
を舟に棹さしては越の松を尋ねぬ

ねとすううんをうへ波をよこささく

なをこしれもらひこーの松 西行

は一そくしぬ京書一辨をわすれぬのハき用の指

丸茶を新寺の長老古ふ因りれハ若ぬ又逢河の少枝
もの徳神子尺送るは書かしたまひ来り雲々の風京こ
さううひつけきおそくゆれぬ化を外とわぬと改

つらねてみる

物さこ扇引さく好勝りハ

五丁山へ入る永平寺を礼す是元禄の御寺に邦操を里を
廻るわらふ山はけを記す一書かぬるもや福井を
三里はくわれハ飯志 一物さしたるぬのさるも
うに学裁の古くは士あつたわの寺はにんを山うそを
あぬおすをいはずといふ先さふゆひてゆもや將死
よと人さるわねれは中を存命しとそこもを 西市中
そと入してあやハ小家さるを瓜のえとてのく終はけ
きにたわつしを記すはさうらうらうをさけは後
けぬ女のあしつてわらうはは切もやゆハはけ
ア何しとてこの女はあつた月あつたはあつたあ

しらぬゆりかきしりて秋の草をこころをさくちをあらうは通を
けみかきとせしむむうのつらみのてしむるはつれにたけり
れく大垣の夜を入ら骨良も侍あうりし本よりゆい越人もも
飛さくぬゆりかきしりて秋の草をこころをさくちをあらうは通を
人の夜訪ひさき蘇生のものすむりてくは悦ひ且つて
秘のたしとせしむむうのつらみのてしむるはつれにたけり
せおへと又舟子けりて

蛤
れ

ふらふら子

こころゆぐ秋了

俳諧一葉集文々部

古学庵佛号 編

幻窓 湖中

坎窩 久城 校

菊芭蕉辞

菊んも芭蕉もさうえん竹のわが母の君へあつ牡丹を紅白の是非
ありてむせぬけりてはむせぬけりてはむせぬけりてはむせぬけり
花咲けりてはむせぬけりてはむせぬけりてはむせぬけりてはむ
桂風去る芭蕉のころりやかきしりてはむせぬけりてはむせぬけり
菊のころりやかきしりてはむせぬけりてはむせぬけりてはむせぬ
人ゆき芭蕉のころりやかきしりてはむせぬけりてはむせぬけり
ころりやかきしりてはむせぬけりてはむせぬけりてはむせぬけり

獨りてさみぢきけのこゝろに捨てしものおひ若
堂のくろくも相おのまもさしに風をひくく
ひ人のちきりもあつくさ

松の花のくろくも似し木石の松
つき人れ松くくもく木石の松

海にさあがり白く決定するふくもあつくさ
かきみふくくもあつくさ

道信尊吟解

杖取り学難をけけえまのくらしをめぐりて
手やういのけいも信ちけ武江の東源川の
既く一歩をくくもあつくさ

廻るまじ斗蘇り御の身もあつくさ
消んとくもあつくさ
本の花はくくもあつくさ
うれり松くくもあつくさ
かのくくもあつくさ
まのわくもあつくさ
上りまじくくもあつくさ
松の毛れくるくもあつくさ

既守賦

空月の跡無き空に上りてあつくさ

鳥賦

一鳥小大ありて、居るもまゝ、さうもさうも鳥鶴といひ、大を以て、
 とし、小を以て、及、哺の若くも、僕、とて、中、の、骨、子、を、け、て、成、は
 人、を、あ、ゆ、く、人、を、つ、け、記、は、し、翅、を、あ、げ、て、二、星、の、蝶、と
 け、れ、成、大、手、の、や、う、を、知、し、ま、な、く、さ、さ、く、さ、ま、を、あ
 ら、し、む、と、し、く、さ、の、あ、け、ち、の、あ、ま、さ、か、の、ま、な、め、あ、ま、
 ゆ、く、か、人、の、詩、歌、の、才、を、持、ち、し、し、の、あ、ま、さ、か、の、ま、な、め、あ、ま、
 か、し、ち、を、あ、ま、さ、く、只、食、料、の、中、の、い、ち、お、し、を、は、大、し、又、油、の、花、を
 う、も、ふ、つ、お、ち、を、は、あ、ま、さ、く、ま、な、く、大、に、能、中、の、骨、子、を、け、
 性、信、強、く、あ、ま、さ、く、翅、を、あ、げ、し、く、翅、の、爪、の、ま、な、め、あ、ま、
 を、お、さ、れ、け、肉、の、味、を、あ、ま、さ、く、あ、ま、さ、く、ま、な、く、さ、さ、く、さ、ま、を、あ

啼、け、人、不、可、の、言、を、抱、く、さ、ら、ん、出、事、を、い、ひ、て、愁、を、
 む、く、ふ、里、を、あ、ま、さ、く、八、葉、の、積、を、あ、ま、さ、く、四、時、を、あ、ま、さ、く、
 を、替、へ、し、く、根、の、音、苦、の、苦、を、い、ひ、て、く、あ、ま、さ、く、存、の、か、い、こ、こ、つ
 う、み、の、村、を、あ、ま、さ、く、人、の、戸、を、あ、ま、さ、く、牛、の、行、を、あ、ま、さ、く、
 て、路、を、い、ひ、の、け、あ、ま、さ、く、い、の、ら、を、あ、ま、さ、く、鈴、の、志、何、を、い、ひ、て、あ、ま、
 さ、く、を、あ、ま、さ、く、一、足、を、あ、ま、さ、く、は、ま、ま、さ、く、く、大、く、く、女、を、あ、ま、さ、く、
 さ、く、あ、ま、さ、く、く、海、を、い、ひ、て、い、ひ、合、飲、を、い、ひ、て、か、し、ち、を、あ、ま、さ、く、
 後、を、あ、ま、さ、く、人、を、あ、ま、さ、く、く、受、信、を、い、ひ、て、秋、氏、を、あ、ま、さ、く、
 も、甚、く、い、ひ、て、い、ひ、て、海、を、あ、ま、さ、く、く、一、足、を、あ、ま、さ、く、く、
 三、足、の、金、鳥、を、あ、ま、さ、く、く、あ、ま、さ、く、く、

笠張祝

くまに... 大かま... 系れ...

銀河序

か陸... 横... かく... かく... かく...

膝... かく... かく... かく...

あゝ海や川

伊勢の跋

あゝ... かく... かく... かく...

再々ふとて是をまけに甘くあはれかては
くはちちけいしやうにたもててあはれは
ちのめとくあしうに

虚栗集跋

栗のよゝ一葉其味何なり
李杜の酒をたてて寒山は雪をすこ
其白くはけりしきくはき
後天の世のその生^ッりしあはれり
ひらひぬ栗や
急の情つゝ
小島上陽人の室の中より

下のふと肩より親むの娘あまのけふ
あけりし寺の火のあまの娘を
後をよわつし心をあまの娘
其語震動あまの娘を
泉と文字の流は是のたのめり
好めぬとて待

閑片箴

あけりし寺の火のあまの娘を
あまの娘をたててあはれ
あまの娘をたててあはれ
あまの娘をたててあはれ

おしめけをききかた又ききかた入ておひもておん

海の色はいよいよおひもておひもて

自得箴

おひもておひもておひもておひもて

おひもておひもておひもておひもて

札銘

おひもておひもておひもておひもて

おひもておひもておひもておひもて

おひもておひもておひもておひもて

座右銘

おひもておひもておひもておひもて

張白

おひもておひもておひもておひもて

おひもておひもておひもておひもて

一 歌 重 德 山 自 笑 梅 箕 山
 莫 懷 首 陽 餓 這 中 飯 顆 山

歌公のかみ髪を生きかきみかきめふらゝんてつゝおぼろけ
 けりて多きいづつのはげとも是をたぐみりつけり花
 入る急ぎをいへされはたこのつゝめさるゝさきえり
 つゝつゝ海をもいへされはたこのつゝめさるゝさきえり
 夢虎のいみしき婦人つゝめさるゝさきえり
 心ゆゝつれやのし用ひて居士素翁を乞ふこれの名をえ
 きしむ世とて茶のたぐりて女白とれ山とてもやふら
 けし山とて山とて中とて飯顆山の志村の住り地とて
 李白のめりの中れめりし李白のめりし李白のめりし

きりて人いふはつゝめさるゝさきえり
 是一重とて重とていふはつゝめさるゝさきえり
 物らつゝめさるゝさきえり

極古篇

つゝめさるゝさきえり
 お月さまさるゝさきえり
 とらんとされは情胸中をさるゝさきえり
 難の應心ありて極古篇とて極古篇とて極古篇
 をはくゝつゝめさるゝさきえり
 強とてつゝめさるゝさきえり

鄙言 白の

おのちのちのけさるるを信はばおとあふらう

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

興 或人文

大和心長尾の里いしあふささうるおきさぶるあふらう

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

第一 秋七日 雨星文

えぬと文有七日の秋風や天のしら白浪

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

第一 秋七日 雨星文

あつたつてはくし人かふ人かふあつたつて

通明のうら

七ツ子かきひらき結合羽 松風

雪竹韻

梅の素門雪竹とくは梅もわびぬ梅のころの春
あつむけはははを画しては梅もわびぬ梅のころの春
果は十季ゆかり予は梅の五季ゆかりのころの春
一こ梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは

こちつむけ梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは

梅折賛

此梅のをんく名付けのまのえ上つては梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
なは故葉のよか物にわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびのわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは

此梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは

梅折賛

梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは
梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは梅のわびは

あはれにのちのち... (faint handwriting)

あはれにのちのち... (faint handwriting)

狂心漢

侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)
 侍従必相公の器... (faint handwriting)

西の五人賛

すとんと... (faint handwriting)
 すとんと... (faint handwriting)
 すとんと... (faint handwriting)

猿骨費

ろの人の... (faint handwriting)

東順傳

夫人未所... (faint handwriting)
 夫人未所... (faint handwriting)
 夫人未所... (faint handwriting)
 夫人未所... (faint handwriting)
 夫人未所... (faint handwriting)
 夫人未所... (faint handwriting)

あゝとてかひかきうれ床のほこしきし種こゝれひ物
さうしぬのむかひかこみこしと大余妙典の共さうあう
小野野をきひて恒の産ししはる何某の果より清
そんりさ登魚龍巻の巻さうあうさうさうさうさう
てあゆのさうを破る杖を折て葉をすつ取すら十
けりめし市店をひけりかこしこのいさるを放
れささうあう十手ゆりて年の子さうの車こし
ゆ上り生れてあゆり物さうは是花大治の市の人
る

入月の法ハ机北田陽之丸

常業録

金華を獲てて敷てるゆりさうハ士の志し文質備
さうさうもし君子のいさるしすね合の事ハ義を
わして穿てて紡りて糸をさうさうさうさうさう
肺肝のさうさうさうさうさうさうさうさう
九とさうわいさうさうさうさうさうさうさう
法をきひてさうさうさうさうさうさうさう
いさる母はさうさうさうさうさうさうさう
あうさうさうさうさうさうさうさうさう
月をさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう
年の母さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

すゝくはあまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの
いそぎの十の娘を築いて一帯の中をなすいそぎの
楼の傍にありて六十八樓といふていそぎの
也あまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの

成金記

古くはあまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの
いそぎの十の娘を築いて一帯の中をなすいそぎの
楼の傍にありて六十八樓といふていそぎの
也あまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの

ふくしきなりきあまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの
いそぎの十の娘を築いて一帯の中をなすいそぎの
楼の傍にありて六十八樓といふていそぎの
也あまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの

あまのむすむす記

石山のおくをむすむすの子孫なりしかの遠くへの
いそぎの十の娘を築いて一帯の中をなすいそぎの
楼の傍にありて六十八樓といふていそぎの
也あまのむすむすの子孫なりしかの遠くへの

かみ穀子丈う峰 橋より山あり是はの里をいづくろ
 茂くくゆ一ろちさるまふけん業葉集の姿あり
 多代能守くふあふいしはの橋よりひの橋の松の
 棚つらう 行のあやまをあかしく松の橋をけはらつくかの海
 業よりあまをいしゆひまほゆきもあましくまほゆき
 の流よりあふくは只餘解の民とあましくは長都よりまほく板
 町にまじりて風をいづろくまほゆくまほゆくまほゆく対
 岸の流よりあまをいづろくまほゆくまほゆくまほゆく
 一盤のまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 位はゆきまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 一盤の物をもまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 空より長山の傳ひかき風の甲斐はゆきまほゆくまほゆくまほゆく

子よりいづろくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 子もゆきまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 子ぬすくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 木質の柱を越のまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 かねしゆきまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 とも入まほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 かまゆきまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 勢より月をまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 是非もまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 子ゆきまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 一人もまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆくまほゆく
 おもゆる茂好は仕方至命の地まほゆくまほゆくまほゆくまほゆく

室の扉を人々をよこす風をいふをたぬ
子持を芳しく生けぬとていふは
昔能く才ありては二すらつめく
少く老朽を被らる望更文智の
けすみかきくやわかきくね
かみかみ木の木も何うま木に

酒首事記

山を勢りて性をやい水は袖をけく
歌二の百か言位をともめり
同じ位境を盡し風を吹く
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ

けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ
けく山を海首事といふ

白方より花吹入る時の湖

成るる花上の花をけく

松阿の言を九尺大うの枝きわむもの一又餘枝上んか
さの昔葉森とてさやを風来もやううかきうひほを起
す等平の仙術は扱子仙の像に影をもく高外牡丹をおま
る人壽出をゆつたてゆるはくう菊を化さく人示福を笑こ
人下ゆさく新木柑新ハを愛さく人し桂葉のかしらをい
空相ひさうちおゆさる四時をわすれてまうとそけいささ
まうの樂天曰およく唐音を吐瓜を茶を種とて人國を
よらるといふ心を慰すよのみやんん長生保善の音歌を
知る中川の雲をさく

元禄四年仲秋日

文混合の歌

嵯峨日記

元禄四年未卯月十八日嵯峨遊ひて古本々有柿合玉つん此
とて未々をさくおうひて高上ゆするを相志けくくさく
まうしし藤子つさく藤子のぬくう合中の片陽一百あり知
ゆるさくさくわ 机一硯 文席 白氏文集 本朝一人一首
去後物語 源光物語 去休日記 松葉集を置いたの厨
張さくくさきの思ふさくさく(の菓子くくく)右酒一壺をさ
たさく相のさくく酒菜の物くく京より持来たまひし
糸おとどきくさくこれ清閑さくさくさく
十九日早稲川寺に詣つ大井川ありありて嵐山右さく松

文

文

仕尾の甲子にけり ちかき花に詣る人ゆわうのわ片 松の尾林
の中ふ新屋をききりしりす 上への庭のまゝに所ありり
わうしりあふんかの仲母の約とていふをいし約の松のま
ぐりしりしつれは志んくくこれいふふりやきハ二軒屋の床
藪の中より志んくく後と植しりかこくし縁縁の縁の
上り起中を歌う藪中の藪若くふれり 昭君村の柳屋
女房の花はわうしりあふんく

くわうしりや竹の子やわうの人れ 果
るら藪はまけりや竹の節

斜る及て首林をくわうん地系より末なる吉本家へ向く
育より外

廿日水吸吸のふんんと 相紅にまゝ吉本を中の吟とてけり

けりみゆふ子供のくけわまんとけ

首林をくわうしりわうしりの地わうきに 一とあう新破すふ
あしはゆりみりれりる昔のきんまうも合のゆとれりる さいん
くうやうしりん彫き一梁画の壁と風を壁に向くぬれりる
石垣松も葉のふりかられりる竹様のまう 柳の木一とて花
かすけりれい

柳の志やわうしりのせん料理のち

ほしきり大木藪をりる 月夜

まゝやらんいらとあう丸吸吸の山 尾 相紅

吉本兄の方より葉を 湘葉のものれと照してとや月の相紅入ぬ
をくわうて板屋一張りまゝにこくしりしりしりしりしりしりしり
夜半こくしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

曉ちりふかりし時ゆきをすの友ん此のあつ所へ二日の故
屋より四玉の人少しおひこしと語り又四玉とて
控へりてふりておひこしと語り又四玉とて
古来物とてかたし

廿一日昨夜の病よりけきこむしつゝ文のけきも現るる
似たり新よりあつておひこしと語り又四玉とて
そらとて及て古来物とてかたしとて
おひこしと語り又四玉とて
に備書す

廿二日朝の雨降るる人おひこしと語り又四玉とて
遊小甘菊

表よりあつての海へ

海を欲しめしは

愁を位するものも

先無き位するものも

さひさひとあつて

又とて

ふりて

智すも

是のまゝ

あつて

あつて

とて

己の武江より

辰辰

辰辰

千中如水の杖子子に任給し一巻巻の四巻とありて字は二
巻一

むし一巻小瑠河の心一すまれ字

又云

糸行とくろろ杖三丈とくは一と楓一本かまふふを
いふにさき

くろろ柳多るるをさきと一さう

巻巻と又云

物寄の巻巻とくろろとくろろ
か代かおされ心子物寄とく

廿三

くろろお八木魂子ゆくは月

文の杖や木魂のゆきは二巻の巻
竿やおさきとくろろ杖のすまみ
巻の積や候子とくろろ巻を在
一とく(巻何とくろろ巻を在
巻何の候子とくろろ巻を在)

廿四 題首柿合

豆粒の細く木粒をく名巻の丸 凡此

そと及くさ木系とくろろ積所別ありて清息大伴の尚白
より清息何れ凡此巻の望岡を編方何れ巻伯凡此巻の尚
廿五 子那大伴の尚白史邦文草尺訪

題首柿合

你對味味伴鳥魚 就荒毒似野人居

枝取今夕赤虹卯 青葉く取堪学書

石小督墳

強摸忍情出涼言 一輪秋月野村風
青季伴相水琴韻 何處孤墳竹樹中

茅如しよりニ葉より茂る樹の夜 文章

途中の吟

ほろいさけふくや 枝も梅さくら 史邦

青山谷く感句

杜門覓句陳冬已 對空揮毫春夕游

乙州本より武江の吟并智玉分の御紙一を女中より

半俗の言月集入とまふとら海子

白井峠をとりかへし記 文章

梅の葉より取らるる 月

秋分より休人よりとらふ至ひとら

字取の山女より取らるるをかりてわら

つらつらとをえくゆくも 堪 忍

中の刻よりより 雷煙電陣を就るをとり対電陣

大あつたかしの木より ちりひらふは葉のこころ

廿六々

茅如しよりニ葉より茂ける 樹の夜 文章

くくけの夜よりとりくくくは木 芭蕉

桐生くのもよりけふふ角よりとら 古来

人のくくくくくくくくくくくく 文章

くくくくくくくくくくくくくくく 乙州

為妙の海やとけつて入るの海
大鳴やとけつて入るの海

久崎の海やとけつて大井川と舟をくくると流石とて戸を
流すの海やとけつて舟をくくると流石とて戸を

三日北風の雨降しくくと流石の海に尚々武江のり
とて川海改りたか

同日 舟をくくると大井川と舟をくくると流石とて戸を
舟をくくると大井川と舟をくくると流石とて戸を

めくくると

さみよれや名残の海
船の海

修験大佛記

いふれふれはたし新天佛とてささひを改め新東下さの聖位
系上人の御法なりとて 四甲子年とて入て四友宗七宗各ひさし
ふりささひの命とてかの御子とて仁王門持権の法に枯れ
葉の御子かかれと相もひさしとて向ん獲くつりすよれのひ
しとていひけんとてささひの御子とて相もひさしとて向ん獲
葉の御子の御子とてささひの御子の御子の御子の御子の御子の
岩窟にもあはれておのれも御子の御子の御子の御子の御子の
ひみくひみくひみくひみくひみくひみくひみくひみくひみくひ
御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の
を養へ上人の御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の
最て御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の御子の

丈六子 功在 ちりし 石れ 止

贈風信子歌

風信子 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より

白髪吟

白髪 吟 武陵より 古里より 二十とよ
月より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より

白髪 吟 武陵より 古里より 二十とよ
月より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より

果年歌

果年 古里より 二十とよ
月より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より
花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より 花より

卯月の沖次次方の浦一尺と云ふ人から丹山に書きたりけり月
 の節に就ては喜の多かる事あり其丹山の事にて秋を宗す
 るにやや物に及ばずきりぬ
 なるめれと云ふの事ありけり月

更科妹捨月書

妹捨の月と云ふ事ありけり八月十五日の夜
 之をきく人数くればけり夜にありて多かる事ありけり
 月と云ふ事ありけり八月十五日の夜にありて多かる事ありけり
 月と云ふ事ありけり八月十五日の夜にありて多かる事ありけり
 月と云ふ事ありけり八月十五日の夜にありて多かる事ありけり

おのづけや妹の心は月夜の友
 いさよひとまはす文科丸取の由

義をたつと云ふ人ありけり
 名をたつと云ふ人ありけり

其のけしきも寺を思ふにありけり
 此れは名と云ふ人ありけり
 ちかきと云ふ人ありけり

ふまをばはるるのいゝのいゝ
松十
くまの城

田中一兵衛様へ
人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり

いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり
いふ人よりけしはのき所舎中此新なり

ち住虎城

五十手やらのいゝ若松の老本より
みの虫せいのさるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より
さるるいゝ若松の老本より

千面を道一留居の時千手観世を以て於其無量壽菩薩の
 像に坐すべしと云ふ事ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと
 傳へしとて同行する所ありとて坐すべしと云ふ事ありと

此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは
 此の事しりしに
 一人志すは

木

修善寺

ふふし昔海に樂天の詩をよみし支那のく木を以て
 夫如智月の物の交未おしりまのゆりおんり
 ふふしそれの中にも性然は沙の海に舟をりおんり
 むむもそしりやちり風をこころに三子者の志をこ
 さんやましそおの友とす人々味く洋くのこころ
 きしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 けはけしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 やし思ひしそおの友とす人々味く洋くのこころ

かくし三石の舟りきしおの舟りきしおの舟りきし
 この舟りの風情を思ひしそおの舟りきしおの舟り
 とし船の系瓶を思ひしそおの舟りきしおの舟り

あふふし昔海に樂天の詩をよみし支那のく木を以て
 夫如智月の物の交未おしりまのゆりおんり
 ふふしそれの中にも性然は沙の海に舟をりおんり
 むむもそしりやちり風をこころに三子者の志をこ
 さんやましそおの友とす人々味く洋くのこころ
 きしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 けはけしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 やし思ひしそおの友とす人々味く洋くのこころ

あふふし昔海に樂天の詩をよみし支那のく木を以て
 夫如智月の物の交未おしりまのゆりおんり
 ふふしそれの中にも性然は沙の海に舟をりおんり
 むむもそしりやちり風をこころに三子者の志をこ
 さんやましそおの友とす人々味く洋くのこころ
 きしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 けはけしとまぬいすして飲中八仙の遊ひおんりやつれ
 やし思ひしそおの友とす人々味く洋くのこころ

船に乗りかへて内舟の舟長と奉答の船をひらりりおしめ
 きたり新船の舟長ゆへに九つは庄花川の舟にゆきしをいふ
 子舟尙白まがらうしゆゆれぬおれぬをいふ更いふ事
 三井寺おれしゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちよよし舟敷のちよゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ずゆ韓愈の文をよみゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちよゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 本舟の舟長

かえ船

十月の舟に乗りかへて舟長と奉答の舟をひらりりおしめ
 きたり新船の舟長ゆへに九つは庄花川の舟にゆきしをいふ
 子舟尙白まがらうしゆゆれぬおれぬをいふ更いふ事
 三井寺おれしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちよよし舟敷のちよゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ずゆ韓愈の文をよみゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちよゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 本舟の舟長

ときつ子の継むくの純子の元をくちたつこの舞のちりつくと
 うかぬ志のハ人目なきのひまわりあつて陶朱の舟の
 のまこまゆめあつてあつて一人の家々の影をくつてあつて
 子載女の紅裙の花婿の翠袋をくつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 山をりつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 にあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

